

『忘れないこと・伝えたいこと』  
戦争体験記、平和作文集

平成17年7月  
栃木市

“いかなる理由があっても、戦争だけはやってはいけない。”

戦争を知らない戦後生まれの方が人口の7割を占めるようになった今、平和な世界を実現させるために私たちができることは、先の大戦での苦しみ、悲しみを風化させることのないよう、戦争を体験された方々のこの想いを後世に伝えることと考え、戦後60周年にあたる平成17年に、戦争体験記と平和作文をお寄せいただくことといたしました。

22名の方々から寄せられた作品は、どれも戦争の悲しみや平和の尊さを訴えかけてくる、心に響くものです。

世界では、今も戦争やテロが続発しています。

この作品集が、戦争や平和について考えるきっかけになることを望みます。

平成17年7月

栃木市

## 戦争体験記 ～戦争の記憶～

No. 1	戦争体験記	…… 赤間 ぬい子 ……	1
No. 2	戦争体験記	…… 荒川 造酒三 ……	3
No. 3	戦争体験記	…… 荒牧 栄一 ……	7
No. 4	敗戦そしてシベリア	…… 出井 新一 ……	9
No. 5	空襲で逝った18歳の兄を想う	…… 内山 謙治 ……	13
No. 6	私の戦争体験記・引越しと経験の記述	…… 大島 美智子 ……	17
No. 7	飛行兵の末路と平和への感謝	…… 大森 進 ……	21
No. 8	戦争体験記	…… 川島 博 ……	25
No. 9	陸看の戦争体験記	…… 佐藤 サイ ……	29
No.10	陸軍少年兵始末記	…… 清水 益雄 ……	33
No.11	二杯目のごはん	…… 早乙女 幸子 ……	37
No.12	これが真実だ	…… 関口 邦一 ……	41
No.13	戦争体験記	…… 田中 幸雄 ……	45
No.14	宇都宮空襲 戦争はいやです	…… 塚田 ユウ子 ……	49
No.15	井上挺進隊の最期	…… 中田 英 ……	53
No.16	平和への願い	…… 西田 俊子 ……	57
No.17	十七歳での軍属	…… 水上 文一 ……	61
No.18	戦時中の父母を想う	…… 湯澤 トヨ ……	65
No.19	戦時下の女学校生活の思い出	…… 匿名希望 ……	69

## 平和作文 ～平和への想い～

No.20	大きなおにぎり	…… 田村 祥子 ……	73
No.21	平和作文	…… 知久 文子 ……	77
No.22	平和ヲ雲ニ託ス	…… 盛田 広 ……	79

※ 掲載順は氏名五十音順といたしました。

また、内容はほぼ原文のまま掲載してあります。



## = 戦争体験記 =

### 赤間 むい子

大東亜戦争がたけなはの時、私は小学五年生でした。その時の私の学用品は手作りの手さげ袋。その中には鉛筆とワラ半紙、それに御飯に梅干だけのお弁当でした。

学校での授業は、教科書がない為に先生が黒板に問題を書き、私達がそれを読み答へるのです。

こうした授業中の事です。突然空襲警報のサイレンの音が教室に飛び込んで来たのです。すると先生が、机の上はそのままにして早く裏山に避難しなさいと叫ばれたのです。私達が林の中に入ると、間もなく轟音と共に飛行機の編隊が低空で東へと向かって行くのでした。この時飛行兵の姿が私にははっきりと見えたのです。それから間もなく宇都宮が空爆を受け、多くの死傷者が出ました。

又私のたった一人の兄に招集令状が来たのです。二十才になったばかりの兄は軍服を着、両親の前に直立不動の姿勢で立ち、お国の為に精いっぱい戦って来ますと挨拶をし、家を後にしたのです。

それから一ヶ月後、兄戦死との公報が入りました。

兄はフィリピン沖戦場に向かう太平洋上で敵の空爆を受けたと言うのです。この報を受けた母は、お国の為に亡くなったのだからと涙を見せる事はありません。

ませんでした。

やがて日本は力尽き、敗戦を迎えたのです。私は学校から帰ると、いつものように一人道路沿の畠で草取りの手伝いをしていました。

すると一台のジープが止まり、内から二人の米兵が降り、私の方に近寄って来るのでした。道でも尋ねるのかと思っていましたら、いきなり私の腕を捕まいたのです。私は大きな声で悲鳴をあげ、力の限り振り払い家へと逃げました。いつも学校で先生から、進駐軍には気を付けるようにと厳しく注意を受けていました。家に着きほっとして振り返ると、先の米兵がづかづかと庭に入ってくるのでした。

運悪く家族が留守だったので、私は倉の中に駆け込み、大きな桶の中で息をひそめていました。暫くして外に出ると、米兵の姿はありませんでした。この事を帰宅した母に告げると、母は私を強く抱きしめ、無事でよかったと涙を見せたのです。

終戦から六十年、私は今、平和な日々感謝の気持ちでいっぱいです。

## ＝ 戦争体験記 ＝

### 荒川 造酒三

外地と言われる且つての支那、満州、或いは南方戦線と違い、私の戦場は内地、東部四一〇一部隊（横浜野毛山連隊本部）である。いわゆる高射砲兵隊で首都圏の防衛が任務。

B 2 9 機による昭和二十年一月十日の東京大空襲は体験しないし、横浜市の中心部の空襲にも遭わないが、終戦間近い八月七日の横浜市北部、つまり「鶴見」を中心とした空襲に遭い、生死をかけた戦闘を展開した。

この朝、四時を廻った頃、空襲を知らせる警報が突然鳴り響き、同時に中隊無線室に「注意報」でなく「敵機来襲、全員戦闘準備につけ」の連隊本部からの命令が来た。私が千葉の高射学校を卒業して鶴見三池公園上の山中に設置された「三池中隊」に見習士官として配属されて以来、初めてのことである。

中隊は、総人員が一二〇名足らず、中隊長が中尉、小隊長が二名の少尉と二名の見習士官で構成する、いわゆる「独立中隊」なのである。

戦闘配備についての将兵は、それぞれ六門の高射砲に乗り、ある者はタマを運び、中隊長の“射て”の命令を待った。砲台内中央部の指揮台に立った中隊長は来襲する艦載機に向かって「高度二、〇〇〇、次は航速〇〇、航路角〇〇」と号令するところ、余りにも敵機（飛行機）の来襲が激しく、その上、

五機、十機、二十機とこちらに向かって来襲する左方に右方に飛んで行く飛行機の来襲に、その一機へのマトをしぼれず、中隊長はやむをえず、とっさに「分隊、各門射撃」の命令を下した。中隊の砲は六門、その中央後部の指揮班に高度や航路角などを計る観測器と少尉の観測班（班員十二、三名）がいるが、敵機は余りにも低く多数のために、砲の周りのタマ運びやその補佐役に廻った。

私は第五分隊を受け持って円堤上にかげあがり、一門の指揮をとったのであるが、何分にも初めての体験の戦闘のため、砲口スレスレの位置に立つたために、あわや砲身で投げ出されそうになった。

夢中で「高度二、〇〇〇、射て」と分隊に命令した。

兵士たちも、このあと出される航速、航路角の号令などは出ないまま「ねらい射ち」の方をとった。十数発のタマを撃った。これに対応する敵機は爆弾でなく機関砲で撃ってきた。そのタマがあたりに十メートル位の巾の広さに“ブス”“ブス”と地面に当たり、砂ほこりをあげる。

この戦闘も十分位で機影が消えたと思った瞬間、今度は同じような敵の艦載機が十数機、またもや高射砲陣地に向かって飛んで来た。

このとき、二度目の戦闘を展開したが、私たち三池隊の撃ったタマの破片が飛行機の近くでさく裂した。（そう思っている。）機は、黒い煙をはいて東京湾方面へ。この日の戦闘は終わった。

これを機に敵機の飛来はなかった。わずかに三十分足らずのものだった。

中隊の損傷は、兵舎で治療中の一人の兵士がこの機関砲のタマが足に当たってケガをした。

高射砲と飛行機のたたかい、つまり殺すか殺されるかの斗いは短かった。激しかった。朝食前のわずかな時間の戦闘だ。正午からは再び敵機の来襲に備えて砲門の手入れだけで、この日の訓練はやらなかった。

<sup>かえり</sup>顧みるに私たち高射砲兵は、「砲」という兵器を手元に、生死をかけての戦いに臨んでいるわけだから、或る一面、心強いが、同じ空襲をうけて逃げ迷う東京、横浜の市民の心情はどうだったろう。淋しい極限に立たされたこととと思っていた。事実、終戦の翌日に私は兵二名を連れて野毛山の連隊本部に行った帰りである。途中に出会った小学校四、五年生数人に「兵隊が意気地なしだから日本が負けたのだ。」と怒声を浴びせられた。そのうえ、通り過ぎた途端に路上に転がっていた石コロを拾い、投げつけられた。しかしそれも本当かも知れないと、あえて反発する気になれなかった。

「高射砲は命中しない。」「タマはウシロで破裂している。」と、ののしる人が多かった。私はその言葉は確かにそうかも知れないが、事實は必ずしも「ウシロ」でのさく裂ばかりではない。地上から空高い飛行機を見た感じはそうであっても、事實は「高度」が間違いなく、飛行機の飛ぶ方向に左右されることを知る私たち高射砲兵は、すべてが飛行機の高さ、航速、航路角に

より飛行機の位置を計り出して射っている者にとっては、必ずしも肯定しかねるのである。然し、敗戦、空襲で灰じんと化した市内の惨状を見、また食を求めてさ迷う当時の市民の姿を目の前に見たとき、子供たちの怒声を感じずにはいられなかった。

## = 戦争体験記 =

荒牧 栄一

昭和18年2月10日に関東軍満州国に入隊し、その年の12月に内地北九州の福岡に配置された。

北九州の教育中のことですが、私は輸送船団を見た。潜水艦に沈められて死んだ人、木や板などにつかまり助かった人もいた。

戦中のこと、アメリカのB-29に日本の特攻隊が2機空中で、1機は墜落し、1機は着地はしたものの乗組員は死亡、2人は捕虜としてアメリカ軍につかまりました。

長崎では、原子爆弾が落とされ市民10万人以上死にました。

高射砲の分隊長として投下の件では、地上1万メートル上空を見ると、アメリカ軍の戦闘機が旋回、原子爆弾落とす場所を見つけている様子。

8月9日11:05原子爆弾を投下された。我が国の高射砲は1万5千メートル、旧日本軍の高射砲は8千メートル、アメリカのB-29は1万メートルを越えていたので、旧日本軍の高射砲は届かない。

東京の大空襲では、アメリカ軍に対して戦える兵器がなかった。

残念なことに日本は戦争に負ける結果となり、原子爆弾が広島長崎と投下され大きな数の人間が死に、又被爆した人々が今だに苦しんでいる。

戦争はしてはならないとつくづく思います。

私は、熱いだけで幸いにも助かりました。

さまざまな戦争を体験し、戦争はしてはいけないと思います。平和を求めることこそ人間としての道と考えるこの頃です。現在もあちこちで戦争をしているが、弱い子供、女達の姿をニュースで見ますが平和になって欲しいものです。

## = 敗戦そしてシベリア =

出井 新一

私は昭和十八年度徴集兵で、昭和十九年三月二十日国府地区五名は、東京駅集合にて東満地区<sup>すいふんが</sup>綏芬河第二国境守備隊に、私は第五中隊の歩兵砲班に入隊、速射砲（戦車を打つ砲）の訓練に励んだ。（国境守備隊は六時間死守することが任務です。）

無敵関東軍も昭和十九年九月東満地区の軍司官山本奉文大將は、精兵を連れてフィリッピンへ向った。昭和二十年になると本土決戦のため優秀な兵器、兵員も内地防衛に移動し、満州は現地召集の補充兵が主力となった。国境から百二十<sup>キロメートル</sup> 軒後方で、国境を突破したソ連軍を伊林<sup>いーりん</sup>のこの地で撃破殲滅<sup>せんめつ</sup>すべく陣地構築に励んだ。

八月九日零時を期してソ連軍の大部隊が侵入し、国境守備隊の五百名は抵抗する間もなく包囲され全員玉砕との報が入る。十日には連隊本部付近に砲弾が破裂。十二日は牡丹江街道沿の二七二連隊が朝からの戦闘で壊滅す。

十三日夜明をまたず、ソ連軍の砲弾が我が陣地に破裂、我が軍も応戦するが五倍の兵力には勝てず、正午頃には弾を撃ちつくす。敵は戦車、自動小銃、我が軍は手榴弾、銃剣で応戦、白兵戦となって、血しぶきを上げての戦はまさに生地獄となった。我が中隊の生残りは半数となり、中隊長殿は戦死、応援の大隊長、連隊長殿も戦死した。大隊本部に集結の命令により左胸部裂傷

の片岡兵長、大腿部裂傷の深谷伍長外三名を連れて本部に合流すべく歩きだしたが、夕暮になり歩くのが遅いので山で夜を明し朝をまったが、夜が明けたら友軍は引上ておりません。昨日より食事はしておらず、明治キヤラメル三箱を六人で分け、食糧もなくトウモロコシの根元をかじり、十七日歩いて三十日に東京城で武装解除になる。<sup>えきか</sup>掖河の収容所に移動のため五百名編成して出発、雨に降られながら歩きました。三日目に編上靴の底皮がはがれ、素足で砂利道を歩きました。道路両側には、ソ連軍の戦車に踏みつぶされたままの友軍の<sup>しかばね</sup>屍が多数散乱していた。落伍するとコーリャン畑に捨てられ射殺される。四日目に掖河に着いた。

九月十六日貨車で出発、ムーリン付近に来ると友軍の屍が散乱していた。十八日国境の町綏芬河、ニニ九部に入隊した時の兵舎を眺め感無量となった。貨車はシベリア鉄道駅グロデコに着き、南下すればウラジオストックから内地へ、しかし貨車は北上してハバロスクを通過してアムールの中流コムツモリスクに。

二十九日第五収容所に入所、三階建の木造建で二重窓にはガラスがなくコモを下げた。冬は二重窓は冷蔵庫がわりのこと。寝台は乾草をひき、上は毛布なのでシラミが蟻のむれのように多発し、夜になると南京虫も出て来てよく眠れない。

スターリン憲法 第三條 働かざるものは食うべからず

朝は暗いうちに整列し作業に出発、一日ノルマ（作業量）百パーセントが一人前です。

十月には雪も降り、満州での夏の服装に防寒外套（綿入ジャンパー）<sup>がいと</sup>なので、手足が寒さをとったりこして痛みをおぼいるので動かさないとはいられません。

食事は満州で積んだ精白しないコーランと味噌汁で、コーランは消化が悪く下痢し赤痢が流行して、一日八回トイレに行く人は助からない。多数の犠牲者が出ました。脳症になって家族の名を呼び大声でどなる人は半日くらいで息をひきとった。<sup>また</sup>亦作業から帰り夕食まで時間があるので休むと、冷たくなって食事にも起きられなくなり息を引き取った。

二十一年春までに半数位は異国の土となった。私も栄養失調で脳に栄養が行かなくなり、言語障害となり声が出なくなった。それでも作業に出掛けたが、現場まで半道位ある途中、五、六回転倒してしまった。作業を休むと小麦そのまま二十粒に湯を多くした時もあった。<sup>こさじ</sup>小匙一パイ位米粒がスープに入ると、膝がしっかりして作業に行っても転倒しなくなる。

十二月十三日栄養失調と言語障害で入院、翌年三月中旬退院し、今度は貨車に石炭積、建築、草刈りに従事した。五月頃になると雁の群が空を飛んで行くのを望め、羽があれば内地へ帰れるものと望郷の念にふけました。また作業から帰ると、何月何日ダモイ（内地に帰る）と話しが舞い込む。其の日

を楽しみに、其の日がくると又何月何日とくりかいされた。又各地の土産の  
おいしさ自慢話に花をさかせました。

帰る日楽しみに作業に従事し、冬は零下二十度、時には零下四十度の冬を  
三度過ごした。

昭和二十三年五月十三日コムツモリスク第五収容所出発、二十日ナホトカ  
着、高砂丸に上船、二十五日舞鶴着、三十日我が家に復員。

戦争とは敵を殺さねば自分が殺される悲惨な生地獄です。勝てば官軍、敗  
れば賊軍と言われ、負けてはどうしようもありません。

厳寒の異国で帰れぬ友思い

我れ帰りしも夢にみるなり。

## = 空襲で逝った18歳の兄を想う =

内山 謙治

兄の60年目の命日にあたる今年4月4日、私は川崎市浅田町の一角にある小さな児童公園に足を運んだ。いつもの年なら五分咲き程の桜が私を待ってくれるのだが、今年はまだ蓄<sup>つぼみ</sup>が膨らみ始めたばかりだった。

栃木市役所で開示してくれた私の生家の古い戸籍簿に、「氏名 内山長治 昭和20年4月4日午後2時40分、川崎市浅田町〇丁目〇〇〇番地で被災し死亡」と記載されている事項を手懸<sup>てが</sup>かりに、数年前には川崎市役所を尋ねて現在の住居表示と照合してもらい、今の浅田町児童公園付近を兄の終焉<sup>しゅうえん</sup>の地と特定することが出来た。

5歳年上の兄は昭和19年の春、栃木商業を卒業してすぐ、川崎市にある富士電機株式会社に入社した。16年末に始まった太平洋戦争の勢いは、兄の就職した19年には既に傾き始め、太平洋に点在する島々は連合軍の手に墜<sup>お</sup>ち、そこから飛び立った爆撃機によって本土が空襲を受け始めた。「7月、サイパン島守備隊玉砕」「8月、グアム島守備隊全滅」「10月、レイテ沖海戦 日本連合艦隊の主力喪失」そして「11月、B29東京を初空襲」と、落日の色濃くなる時に兄はなぜ京浜工業地帯の川崎方面に就職したのだろうか。兄の意志に対し、両親は地元への就職を説得できなかったのは何だったのだろうか。いま手元に兄が書き残した唯一の遺品である昭和16年の当用

日記帳がある。

その日記帳を読むと、これらの謎を紐解いてくれる想いがする。未だ20歳に満たない兄の純真な心を軍需品生産に駆り立てた悪魔の誘いのようなものを感じた。

「(以下すべて昭和16年) 10月1日 1時間目に教練をやった。着剣・脱剣・銃弾そうてんの装填を教わった・・・」

「10月20日 今日は第一国民学校に集合し宮城を遥拝ようはいし、報国団綱領を全員で朗読した・・・」

「12月9日 昨日米英両国に対し宣戦を布告したので学校では証書の奉読をやった」

「12月15日 今日栃木市では米英撲滅市民大会を第二学校の校庭でやった。僕も学年の代表として参加した」

19年の春に家族に見送られて川崎に向かった。その年の暮に里帰りをしたが、僅わずかひと晩栃木の正月気分を味わっただけで翌朝急ぎ足で川崎に戻った。世話になっている会社の先輩に食べて貰うよう両親が搗ういてくれた餅を、私が持って新栃木駅まで送って行った。

「さいな!・・・」とって手を振ったのが、兄との最期となった。

日増しに激化する都市の空襲を案じながら4月を迎えて間もなく、兄の会社

から1通の電報が届いた。

「御子息、空襲に遭い<sup>あ</sup>逝去<sup>せいきよ</sup>される。すぐ来られたし。」

4日未明の工場地帯の爆撃で女子従業員の避難誘導中に被弾し、半日余り生死をさ迷い、出血多量により死亡したことが分かった。

数日後父の胸に抱かれた遺骨と僅かな遺品が生まれ故郷に戻った。その中に兄が着用していた革製のベルトがあった。そこに付着した多量の血のりを、激しく<sup>おえつ</sup>嗚咽しながら洗い落としていた母の後ろ姿は、今もなお私の脳裏から消え去っていない。

奇しくも今年の3月、川崎で死んだ兄の葬儀に関する書類が私の生家で見つかった。その中に兄の勤務先だった富士電機では、社長を始め大勢の役員・従業員が会葬して下さった事が分かった。その名簿を持って今年も4月4日に兄の終焉の地とした川崎市の浅田町児童公園へ行き、没後60年目のこの日に亡き兄を<sup>しの</sup>偲んで手を合わせた。追悼した後、近くにある富士電機の会社に行き、最古参の役職の方に逢って、持参した名簿を見ていただいた。その方が名簿に載っている中の1人の名前を指さした。

「この人をはっきり憶えています。会社を退職後、近所の高齢者の人々と元気にボランティア活動をしていましたが、2か月程前に故人となりました。あなたがもう少し早くこの名簿を見せてやれたら、きっと亡くなっ

たお兄さんの生前のことを話してくれたことでしょう・・・。」

これも宿命というものの仕業なのだろうか。今、兄の面影は生家の裏庭の柿の木と一緒に登ったり、1枚のセンベイを半分に割って食べあったり、新栃木駅で「さいな！」と言って別れたことなど、みな昭和10年代の兄の姿である。

兄の終焉の地浅田町の児童公園で、母親に伴われて滑り台やブランコで無邪気に遊ぶ子どもたちの姿が目にとまった。これからの日本はすべてがこの子たちに託されている。この子たちにどんな恐怖感や苦しみをも与えてはならない。平和の尊さというものを真摯<sup>しんし</sup>に考え後世に語り伝えなければならない。

＝ 私の戦争体験記・引越しと経験の記述 ＝

大島 美智子

私は第二次世界大戦が勃発した年に、東京で五人兄弟の末から二番目の女の子としてこの世に生を受けた。私の記憶は鎌倉の豪邸生活から始まったが、あの生活は疎開としての仮住まいであった。

昭和十八年の夏、一家は今のソウルに移り住んだ。毎日徒歩十分でいける韓河（現ハン<sup>かわ</sup>河）へ次兄と遊びに行くのを楽しみにしていた。昭和十九年の夏の終わり頃、空中戦で日本機が撃墜された。私たちは子供だったので、「日本勝った、日本勝った」と云いながら近づいて行ったが、突然兄が私を側道の草むらに突き飛ばし、兄も水中にダイビングをするように私の横に飛び込んだ。同時に道路はダダダダという轟音と煙につつまれた。敵機は艦砲射撃を加えながら、引き上げたのだった。

昭和二十年八月十五日、大人たち全員がオンドルのある広間に集まり、天皇の玉音を聞いていた。父は出張で留守だったが、母と私を可愛がってくれた朝鮮人の女中さんたちも皆泣いていた。

私には何が起きたのか分からなかったが、あの日を境に全てが変わったのだけは分かった。女中さんたちは一人減り、二人減り、三人だけを残して皆どこかへ行ってしまった。その度に母が沢山のお土産のようなものを持たして、泣きながら別れた。

八月も終わり近くの夜、激しい馬の蹄ひづめの音が聞こえ、母は私たち子供を押し入れの中に押し込めて、「声を出さないで」と云った。玄関で三人のお手伝いさんがハングル語で荒々しい口調で話していたが、何事もなく男たちは去って行った。翌朝、三軒ほど離れた所に住んでいた日本人の家族が、四歳の私の友人も含めて全員惨殺されていた。

お手伝いさんたちの話だと、悪い人が匪賊ひぞくになって、毎夜金持ちの日本人の家族を襲っているらしい。我が家は幸い残ってくれた朝鮮人のお手伝いさんが追い返してくれたのだが、隣家は朝鮮人の使用人は誰も残ってくれなかったのが悲劇に遭ったらしい。やはり、日常の人間関係が私たち家族を救ってくれたのだった。

いよいよ引き上げの行軍が始まった。大人や兄や姉は皆大きなリュックを背に、両手にも大きな風呂敷包みを持っているので、誰も私と弟（三歳）の手を引いてくれない。母は私たちの手を取り、「これから、たくさん歩くけど、お母さまは貴方たちの手を引いてあげられません。もし、はぐれたら二度と親兄弟には会えませんよ。お姉ちゃんがしっかりして二人でついていらっしゃい。」そう言うと、母はどんどん先に歩いて行く。他の日本人も多く歩いているので、油断すると小さい私たちには家族の姿が見えなくなる。倒れそうになる弟のほっぺを叩きながら死に物狂いで追いかけたのを覚えている。夕方凍いてつくような寒さの中を歩いていたら、日本人の兵隊さんが首吊り自殺

をして横の木にぶら下がっていて、凍った死に顔は蠟人形のように白くきれいだったのを覚えている。

その後プサンから舞鶴港に、松江の父の実家に行ったが、五人の子連れ家族が居る場所ではなく、母が買っておいた伊豆の別荘地をたよりに伊豆に引越した。母の土地は知らない人たちが畑にしていたが、少しずつ返してもらって、開拓民さながらの生活が始まった。三年間に五度の引越しをし、引越す度に小さな家になり、最後には屋根に大きな穴の開いたあばら家になった。後日母に聞いたのだが、母は私と弟のコートの綿を抜いて代わりに札束を入れ、一家が生涯生活できるお金は持ち帰ったのだが、封鎖と貨幣価値の凋落<sup>ちょうらく</sup>で貧乏になってしまったようだ。馴れない百姓では生産高以上の供出を強いられ、私たちは海や山で食料を探したり、にわとりや兎を飼って食したり、物々交換をしたりして数年生き延びた。

今日、我が家は当時の敵国から娘婿を迎えている。又、私が留学した時の保証人は、沖縄上陸作戦で受けた日本軍の弾傷が原因で四十五歳の若さで他界した。諸々の人生を考えると、「戦争とは何なのだろう」と思う。名誉と権力欲が人間の欲望にある限り、戦争はなくなる。しかし、戦争で一時は得をしても、結果としては得をする人はいないと思う。どうしたら戦争を阻止できるだろうか、と言うことは一人一人の叡智<sup>えいち</sup>を育てる以外に良い策はないだろう。叡智を育てるには、教育の普及以外にはない。世界中に民主主義

が確立され、個々の人々が考える力と正しい判断力を備えていれば、自己中心的な名誉欲と権力欲の亡者の<sup>せんおう</sup>専横を許さなくなるだろう。その為には長い道のりであっても、世界中の人々が教育を受けられるような環境づくりを、ねばり強く推し進める必要がある。

## = 飛行兵の末路と平和への感謝 =

大森 進

大自然の動きには寸分の狂いもなく、早くも戦後六十周年を迎える。卯月四月は咲く程に舞う程に深まる春。花は何時しか青葉に変わり野山も若葉の装いとなり美しい景観を迎える。それも束の間平和な誓いを新たにと思う八月がくる。地球温暖化が叫ばれて久しいが自然の驚異を肌で感じる此の頃でもある。

～いま心に思うこと～

国破れ、星降りてここに六十年。二度と体験したくない辛苦の時代。父が母が妻や子が涙して歩んだ過去。前線の将兵は軍歌を唇に、空に、海にそして陸に征<sup>い</sup>って還らず。銃後では老も若きも勝つ事を信じて大空襲や飢餓に堪えてきた。時代の流れと共に次第に記憶から風化して行く戦争の生々しさ。その傷跡は日本人の心の底に悲しくもいつ迄も続けて行くであろう。二度とあってはならないこの戦争、子を持って知った親達、いつまでも平和な時代が続く事を思う時、後の世に語りつぐ義務があるのではなかろうか。

～決意。十六才から二十一才まで～

私は昭和十五年八月一日第十四期乙種飛行予科練習生として、霞ヶ浦海軍航空隊飛行予科練習部（後の土浦海軍航空隊）に全国から選ばれた紅顔の美少年（満十四歳～満十六才）、二九五名が希望に夢躍らせ入隊した。（栃木県

で五名内四名戦死)。

当時は、「七つ 鉤<sup>ぼたん</sup>は桜に 錨<sup>いかり</sup>」と唄われ予科練の名を知らぬ日本人はいなかった。しかし予科練がどのような訓練を受け、どのように斗い大空に散って行ったのか、その真相を知る者は今では少なくなった。

予科練とは当時海軍少年航空兵と云われ、昭和五年に創設され終戦迄の十五年間の足跡をとどめたに過ぎない。此の間若きは十五才から十七才の少年が若き血潮を奮い立たせ「憧れ」と「夢」そして「殉国<sup>じゆんこく</sup>の志」をこめ、筆舌につくせない超人的な訓練に耐え抜き大空へと飛び立った。私達十四期二九五名中二三六名が、二十才前後で大空を血に染め散って行った。私はその頃一式陸攻の搭乗員として七五二空に属し、主として千歳基地を基点に北方領土(キスカ、アッツ)方面の戦闘要員として、日夜対潜哨戒<sup>たいせんしょうかい</sup>に従事、不幸にして十八年十月占守島<sup>しむしとう</sup>に向け飛ぶこと三時間余、胸部疾患に斃<sup>たお</sup>れ約八ヵ月間病院を転々とした。療養の甲斐あって再度第一線に戻り勝利を信じつつ、祖国の行方を見つめ乍<sup>なが</sup>ら東に北に凍りつく北海の空を飛翔つづけた。後で耳にした事だが、私達は南方に行く部隊であったが飛行機がなく暫時<sup>ざんじ</sup>北方の対潜にあたるとのことだったという。

～戦争はむごい～

そして考えることは、人類の長い歴史の中に、数知れぬ若者が生還の意志も望みもない特別攻撃を組織的に行った事実は、戦争末期における我が特別

攻撃隊だけであって、後にも先にもこの例がないと思う。私も七五二空に転勤するや直ちに分隊長に呼ばれ、特攻隊員としての心構えを申し渡された。

### ～復員後の思い～

その反面幸か不幸か生き還った者は、きびしい訓練と斗いによって培<sup>つちか</sup>われた不屈の精神で戦後の復興の<sup>いしずえ</sup>礎として奮斗した。そしてこの戦争を斗い抜いた人々のみならず戦後の若い人々にとっても、且<sup>かつ</sup>てはこのように雄々しく生き、斗い、そして散華して行った若者が居たことを忘れないで欲しいし、併せて最も激しく斗った者こそ平和を守る意志の強いことを・・・。

だが巡りくる八月十五日は私自身大きなショックを受けた。それは戦争に負けた事は勿論だが、どうやって死ぬかという教育ばかりでどうやって生きるかについては全く無知だった。それは「軍隊の用は戦闘にあり」という土台はあるが、生きる為の土台の教育は無かった。雨降りて飛行中止の時は模型を中心に死に方の勉強ばかり、そして若人は降り積る悲しみを払いのけ大空へと・・・。しかしその心情こそこの祖国は私達が祖先からゆずり受けたものではなく、逆に次代の子供達からの預りものだという認識が頭の何処かにあったと思う。

### ～だから余生は～

思い出それは遠く去りにしありし日の出来事。よかれ悪しかれこの世に時の流れがある限り、人生それぞれその去り行く出来事を思い出し懐かしむ。

人は思い出に支えられ過ぎ去り行く時の流れの中に立ち我が歩みし人生を振り返る時、思い出は生きる糧<sup>かて</sup>を支える未来の夢や希望を与えてくれる。今日一日体験することの出来ない自分を可愛がり有意義なものにしたい。そして常に今日の平和を守るためにも、戦争の悲惨と予科練の真実の姿を一人でも多くの人に知って貰い、祖国の要望<sup>にな</sup>を担って二十才前後で未曾有<sup>みぞう</sup>の大戦に華々しく斗い、日本人の力を示した功績は歴史上消すことの出来ないものであり、その真実の姿を時には子に折りには孫に語りつがねばならない。

世の中には悲しいことが数多くある。その中で最も恐ろしいものは国民を犠牲においておこなわれる戦争であり、この戦争が人生の理非判断を狂わせることを肝に銘じたい。

## ＝ 戦争体験記 ＝

川島 博

昭和十二年は栃木町が栃木市に制定された。当時私は小学三年生だった。この年に支那事変が勃発し、徐州・南京の陥落時は市の大通りを提灯行列で練り歩いたものだった。三国同盟（日・独・伊）が締結され、イタリーはエチオピアを攻略、ドイツは軍事的物理化学の強化をはかりつつあり、日本も追従を余儀なくされた時代だったのかも知れぬ。

絵画の先生が独・伊に向けて児童の絵を出品するのでとクレヨンを持たされた。

昭和十五年、小学校の修学旅行は明治神宮から横須賀の三笠記念艦・戦艦「陸奥」の内部公開で戦意高揚の気風を植付けられた。

昭和十六年、中学に入校するや軍からの派遣で配属将校が指揮のもと、グラスバンド率いる<sup>えっぺい</sup>閲兵分裂行進が毎週校庭で行われた。授業に軍事教練が盛込まれ、三・八式歩兵銃が肩に重かった。

この冬に大東亜戦争が火蓋を切った。書道の先生は「国民は皆戦士」とか<sup>ぼうちょう</sup>「防諜に現せ大和魂」と題し、それを書かされ後者が県警の入選作となった記憶がある。

村中の至る処は農繁期に人手が少なくなり、間々田町西黒田での協同炊飯に、モンペ姿となった姉が町内二名の娘さんと参加、折しも取材に訪れた故

吉屋信子女史と出逢い「アラ後輩ネ」と一緒に撮った写真を姉が大事に持っていた。

戦争が熾烈を極めつつある昭和十八年、宇都宮の四十四部隊に三泊四日の営内宿泊があった。古参の一等兵が餡<sup>あん</sup>パンを差入れてくれたので新兵に分けてあげたら無者振りついた。「酒保<sup>しゅほ</sup>（日用品の売店）等という処へ行く暇もないし行ったこともない」と呟やく。そして夜馴れぬ手付きで針を持った仕草が忘れられない。深夜、叩き起され出陣兵士達を営庭で見送りした。一定期間を部隊で過ごし順次外地へ派兵されるのである。宇都宮には三十六部隊もあり正に軍都だった。されば昭和二十年空襲に遭い市が紅蓮<sup>ぐれん</sup>の焰<sup>ほのお</sup>と化した。後に宇都宮の中学生達は死体収容に刈り出されたと聞く。

昭和十九年、学徒動員令が施行され、中学三年生が、次いで四年生、そしてこの六月、五年生の我々が日光の軍需工場へ派遣された。「ああ紅の血は燃ゆる」に洗脳され、「女子挺身隊」として女学生も動員された。家から履いて来た鼻緒<sup>まえつば</sup>の前坪が切れ、友がジュラルミンの針金で結んでいるのを真似たが指の股が痛い。底の歯もなくなるような薄っぺらな下駄を履いていた。三交替ともなれば夕方や夜中の勤務もあり寒さも一入<sup>ひとしお</sup>、ダルマストーブが眞赤に燃えていても背中がゾクゾクと寒い。同年十一月一日、父が生活振りを見に来た。久し振りに父子で紅葉の「裏見の滝」を見て「馬返し」まで行くも空襲警報でケーブルカーは運転中止となった。

昭和二十年二月、卒業式の為帰郷。四年生も押出しで同時卒業、正に形式的なものだった。卒業はしたものの徴兵検査などと言ってられぬ緊急事態で、親との生活も永からぬ身なれば取り敢えずあ小山へ就職。工場は機械部品の疎開を始め、思川沿いの修道院二階へ馬車で持込んだ。当家でも祖母が孫娘の為にせつせと買い溜めていた錦紗きんしゃの着物やらをリヤカーに積み、壬生にある姉の友人宅へ運んだ。

家庭では大凡おおよそ一戸当り一穴の防空壕を掘らされ、昼夜を問わず空襲時に逃込む始末。在郷軍人の指揮に依り竹槍のけいこ、焼夷弾の火消しとして棒の先に五十センチ程の縄を何本も取付けたものを作らされた。防火用水も各所に設け、バケツリレーの練習に婦女子も加わっていた。

終戦直前の六・七月は小山にも敵機が飛来し、超低空のグラマンのパイロットがはっきり見えた。この機銃掃射に遭った友人は、トタン板で身を避けたという。

やがて終戦、とはいうものの敗戦である。これからが国民の衣・食・住に事缺ことかくどん底生活。

戦争の爪跡は余りにも根強く深い。長崎・広島がそれを雄弁に物語っている。

以上

あとがき

「戦争体験記」とあるが私は直接の戦争体験はなく、過ぎし日の記憶をもとに間接的な立場で書き綴ったものであるが、一切主観を容れていない。

読者の御賢察を仰ぎたい。

## ＝ 陸看の戦争体験記 ＝

### 佐藤 サイ

支那事変が始めで、「赤紙が来た」と言って働き盛りの青年が招集され、次々と見送り、あの家も働く人が居なくなり大変だろうなァーと同情しました。

私は昭和15年から、14師団宇都宮陸軍病院に看護婦で勤務の時、戦いは昭和16年12月、ハワイ攻撃からタイ、マレーシア、シンガポール等へと進み、戦線の激化に伴い、病院の事務長から、「従軍に看護婦が必要なんだ行ってくれ」、と言う様な言葉に17名が応じ、昭和17年10月行先不明で、宇都宮駅で多勢の人の見送りを受け泣き尽くした出発。横須賀で病院船に乗り、食事は粥食でも、当時日本では米が買えなくなった時で有難いと思いましたが。

シンガポール、マレーシアと行き、石川県から行った6名が私達に加わり陸看23名、日赤、軍医、衛生兵で200名で編成、船は船酔いがひどくて3日間食わずでスマトラに上陸、メダンの<sup>べいたん</sup>兵站病院を引継ぎ、富10311部隊、(南方第十陸軍病院)とし、患者1000名以上、内科病棟は500名を看護婦10名で勤務、伝染病棟は何百名も、外科病棟は5棟で230名前後で看護婦8名で私が婦長、粗末な建物で常夏の国でもクーラーも無し、新聞もラヂオもテレビも無し、デマ放送だけが聞こえるだけ、廊下は外、患者は遠くの部隊からで、時には印度洋の島から2～3日かかり何時も夜中に着

く。虫垂炎等は手術で腹を開けると膿<sup>うみ</sup>が溢<sup>あふ</sup>れ出し、創<sup>きず</sup>にガーゼをたくさん当てて腹帯したのに、匂いがすごくて蠅<sup>うじむし</sup>の蛆虫が腹帯からうようよ出て来ました。輸血と言っても保存血も給血者も無し、私は何回か献血しました。そしてお昼の残り番の時、急患で昼食抜きで夜9時頃までがむしゃらに働き、終わって廊下に出たと同時に眠り歩きし、柱に頭を打ちつけました。前夜も急患で不眠で35時間位連続勤務したからです。入院は一日10～15名、退院は週2日で30～35名位ありました。

当地は、赤痢もアメーバも伝染病になっていないので、隔離しないので殆<sup>ほとんど</sup>どの人が罹<sup>かか</sup>りました。私も保菌者でしたが休まず勤務を続けました。茨城県から同行した看護婦は不幸にも亡くなりました。

患者は手遅れで高熱を出しても当時は抗生物質が無かったし、マラリア病を持った患者とかデング熱等で高熱を出す患者が（看護婦も高熱を出し当直室に一週間位寝かせた。）多くて氷枕<sup>ひょうのう</sup>氷嚢交換は夜中でも看護婦一人が専属でやりましたので夜勤は一昼夜寝ずの勤務です。

現地人の雑役が2人居ましたが、10日毎給料を貰うと翌日から休み、金を使い終わらないと出て来ない。それ以外にも休んだので翌日、「昨日はどうして休んだの」と聞きましたら、「私バジュ（服）ない、ママ着て行った、駄目」の返事。一枚の古服を親子共用で着て居る貧困さ。

風呂は無し、3年9ヵ月入浴せず。夜の水道は断水か、タラ、タラで、常

夏の国なのに、夜中に目がさめたときだけ、水が何とか出たので行水出来ました。

休みは月2～3回で外出日と言い、危険だから3人以上で出る様に言われ、初めて映画館に入ったらすぐ空襲警報がなり、残念ながら病棟へかけ付けました。近くの飛行場が爆撃を受け昼は黒煙、夜は真赤で5日位続きました。

将校病棟勤務の時は、退院した人が、「明日〇〇方面へ片道の燃料で飛びます。最後です。」と緊張顔で言ってニューギニアの話をして居ました。翌日編隊で飛んで行く飛行機を、体がふるえ涙をふきながら見送りました。

空襲が激しくなり、病院は一部を残してペマタンシャンタルに移転しました。

昭和20年8月。5日後れで終戦が伝えられ、「一生懸命やったのに負けたか、くやしい！」と言って看護婦同士抱き合って泣きました。

終戦後は患者を先に内地へ送りました。私達は、荷物制限されたので、戦前は和服だったので和服も持って行きましたが着ずに、外出着も捨て、丈夫な服だけにして敗戦国だからと貧乏生活を覚悟しました。

武装解除は英国がすると聞きました。帰りは英国船で、女には優しく船に乗る時は手を引いて <sup>いただ</sup> 戴き、荷物は男の人が運んで下さいました。

スマトラから直航（船の中は寝る所も無く看板で立って寝て）10日間、昭和21年6月懐かしの日本名古屋港に上陸、途中汽車から見た名古屋と東

京の空爆後の焼野原のすごさ、むごさに腹立ちを感じました。

新栃木駅で制服のまま乗換え電車待ちをしていた時、私が履いて居る靴にさわっている10才位の男の子に気付きました。手縫いで袖の無い汚れた晒<sup>さらし</sup>木綿の服風の物を着て裸足でした。何年も履きすり減った私の編上靴を、地面に片膝ついて何回もなでながら、「いい靴だなあ・・・」を繰り返していました。

途中の焼野原を見、此の子を見た時、戦争のみじめさを痛感し、涙で何も言えませんでした。

終戦当時は、どうせ敗戦国、永久貧乏を覚悟し現在の豊かさなど想像しませんでした。戦争中はお国の為にと皆一生懸命働き、犯罪は少なかったと思いますが、現在は働かず金欲しさからの悪人だらけで、学歴は高くとも人間性の低さを痛感して居ます。

## ＝ 陸軍少年兵始末記 ＝

### 清水 益雄（号・風太郎）

私は大正15年（'26）年。当市万町に生まれた。『大東亜戦争』は昭和16年（'41）年12月8日開戦（註・現在使われる『太平洋戦争』は米国側の呼称）。その時私は15歳。東京・荒川区の遠縁の小さいプレス工場に住み込み勤務。夜は『東京市立二中』（現・都立上野高校）夜間部2年生として、上野・寛永寺坂を、自転車を押して上がる自転車通学していた。

開戦の夜の上野の山からの東京の街は、前夜と一転。警報も出てないのに真っ暗。戦争が始まったのだとの緊張感で夜景に見入った。

開戦したことで軍学校生徒募集のPRを多く見るようになった。働きながら学ぶなら軍人として勉強したほうが…と思うようになり、『陸軍少年飛行兵』志願を母に相談すると、母一人子一人（註・嫁いだ姉はいた）なのだから駄目だと言う。私は三年後、嫌でも徴兵される。皆が来る頃には下士官になっているのだから…と説得してやっと許される。

昭和18年（'43）年2月。宇都宮での第一次試験パス。3月末。立川の『陸軍少年飛行兵学校』で第二次適正検査。『操縦』を希望したが、目の欠陥で『岐阜陸軍航空整備学校』入校となる。立川校で一年。岐阜校で二年学ぶ筈が、戦況悪化のため翌19年7月岐阜校卒業。一年三カ月の速成教育に終る。

7月22～25日卒業休暇。帰郷して親戚を巡り、休暇最後の夜は東京亀

戸の姉宅に母と泊まる。姉には十歳の男を頭に三人の子がいた。

長男は「兵隊さんが来た…」と大変な喜びで私から離れず、夜になると「兵隊さんと一緒に寝るんだ…」と言って聞かず、その子が寝つくまで暑いのを我慢して一緒に寝た。

(註・翌20年3月の東京大空襲で、姉一家は義父を除き所在不明の戦災死。

私を慕った甥も存命なれば今年70歳。つくづく戦争が憎い)

7月末日卒業式後『兵長』に進級。台湾の『独立整備隊』へ配属決定する。満18歳の時であった。

8月13日。24隻の輸送船団とは名ばかりの貨物船団『門司』出港。各船に三千人余が詰め込まれ、甲板には沈没の時に備えて竹の筏<sup>いかだ</sup>の山。その上にまで人が溢れ、飲料水は配給。まるで昔の『奴隷船』もかくやと思う程…。

息づまる乗船十日目の未明。凄い爆発音と振動に我先に甲板に出る。船団中唯一の大型客船に魚雷命中。天を突く太い水柱。その水柱の中に船体が消える。海面に浮いた重油で真っ黒になった兵員の「助けて…」の叫びが波間から聞こえる。その時「魚雷接近！」の声。海面を泡立てて来る魚雷。やられたら飛び込もうと船の手摺<sup>てすり</sup>に足を掛けて待つ間の恐怖。船が軋<sup>きし</sup>む音を立てて体をかわし助かる。大歓声挙がる。敵は何隻いるのかまた一隻が被弾沈没。波間の「助けて…」の声を後ろに、どの船も船列を乱して必死の走行。北の玄関港『基隆』を目指し、やっと台湾の土を踏む。

8月末。台中飛行場駐屯。11月『高雄海軍航空基地』へ進駐。陸海共同の『フィリピン・レイテ湾攻撃作戦』参加。攻撃から帰着の搭乗員が「今日も生きてた…」とフッと漏らす言葉に、操縦にならなくて良かったと密かに思ったものである。

20年2月。台中市近郊の滑走路だけの飛行場へ移駐。古い戦闘機の使えそうな部品を集め、特攻機の組み立て作業中のある日。突如、高々度から爆弾の落ちてくる音、逃げる間もなくその場に伏せる。爆発音が近づき、地面の揺れが大きくなっていく。その揺れの中、今度は死ぬか、この次かの思いの中「かあちゃんー」と叫ぶ。それは声に出たか、心の中での叫びか分からないが、叫んだ。

爆撃が終って恐る恐る目を開けると、辺りは何も見えない程の砂ぼこりであった。この体験は文字にすると相当な時間の様であるが、瞬間の出来事であったろう。老いた現在の宗教感からすると、あの時助けを願った母は、即『観音様』だったのではと思えてならない。

6月1日『伍長』に進級。中旬、沖縄全滅。その頃、本部から部隊に『遺書』を書いて提出の達し来る。いざ書こうと机に向かうと最初に浮かんだのは太平山の景。それを下がって母校第一小。それを下がって巴波川。そして万町の生家。映画の画面の動きの様に次々に浮かんでくる。故郷の景を思い出しながら何を書こうかと考えたが、結局は母に先立つ不幸の詫び。俺の寿

命の分まで長生きして欲しい…と書いた。私は幸運に恵まれその遺書が自宅に届くことはなかった。

敗戦の報は15日の夜に知る。その時の思いは、大敗北と、東京大空襲で全滅した姉一家の無念を晴らせなかった悔しさに泣いた。

宿舎付近の民家の電灯は、前夜まで真っ暗であったのだが、煌々とした輝こうこうきに開戦時の東京の真っ暗な夜景を思い出し、これが平和というものか…とその光に見入った。

昭和21年1月半ば、帰国・復員命令出る。2月24日朝。夢に見た故郷・栃木に着く。

私の十九歳半ばの時であった。

◇ '04年・喜寿の祝いに ◇

散華した若さの四人分を生き

風太郎

## = 二杯目のごはん =

早乙女 幸子

今晚も、色の悪いサツマイモの上に、チョコチョコ米粒が着いている小さな茶碗。いつもながらの我が家の食卓だった。十才の食べ盛りの私にはとても足りる量ではない。母親が自分の器からそっと足してくれるのも、いつもの習慣通り。精一杯勤労奉仕をしてきたきょうは、どうにも空腹に勝てず、そっとおかわりの茶碗を差し出してしまった。

すかさず、パシッと母の一撃が飛んで来た。

「とうちゃんの分が無くなっちゃうでしょ！」

警戒警報発令と同時に、軍需工場にかけつけることになっている父親は、急いで鉄かぶとをかぶり、ゲートルを巻いて出て行ったままだったのだ。じいっと私の目を<sup>とら</sup>えて離さない母の目には、涙が<sup>あふ</sup>溢れていた。幼い私にはその涙の真意が読み取れないまま、ただただひもじさが辛くて一緒に泣いた。

灯火管制下の真っ暗な夜。あとは寝るしかない。

父親の任務の関係で、全く親類縁者のいない、この栃木市に疎開してきた我が家にとって、終末に近い戦争の風は厳しく当る。食料に変身する母の着物も、もう底をついているらしかった。

どれぐらいまどろんだであろう。

「サチコ。起きておくれ。」

低い緊張した母の声に、飛び起きる。

雨戸の隙間からのぞいた南の地平線あたりが真赤だった！この世のものとも思えぬ光景だった。

(地球が割れた？)

あとで知った、これが東京大空襲だったのだ。昭和二十年三月十日未明。下町地区に集中して三時間続いた空爆で、十万人近くの死者を出し、一面死体の海になったという。父母の知り合いの中にも犠牲者が出た。あれから六十年経った今も、どこに葬られているのか不明なままの人がかなりいるらしい。

「パシッ」の母のあの手は、針金虫のような細い私の手首をぎゅっと握ったままだった。長い沈黙。母は声を殺して泣いている。私は寒さに震えながら見入っていたが、あとから考えると、あれは恐ろしい地獄絵の遠景だったことになる。

美しくも悲しい悲しいあの空の色は、以来私の脳裏に焼き付いてしまっている。

七十才・ひとり暮らしの今、我が人生の締め括りの時期と認識している。来し方への大部分のおもいが、どうしても太平洋戦争につながってしまう。

このごろは、小さな茶碗を愛用して、二杯食べることにしているごはん。二杯目は、私の宝物である。これは、銀舍利だけでゆっくり味わう。最後の

一粒までていねいに。この幸せを神に感謝しながら、走馬灯のように出没するあの頃への想い……。

幽霊のような姿で復員してきて、マラリアに苦しみながら死んでいったにいちちゃんの顔。

中支への出征のとき、

「サチコへのおみやげは、チャイナ服にしようね。」

と、私のオカッパ頭を撫<sup>な</sup>でながら言った明るい声が、鮮明な残響になって聞こえてくる。

終戦間もなくの、一家で苦しんだ栄養失調と伝染病感染。樺太からの引き揚げ者家族六名を受け入れての、長い雑居生活。ちなみに、戸主である叔父は、理由も判らぬままソ連軍に捕えられ、どこかに連れていかれたままだった。焼け野原と化して、永遠の幻になってしまったあの生まれ故郷への熱い片思い。

(戦争さえ起きなかつたら……。)

と、つい反芻<sup>はんすう</sup>してしまう、むなしい架空人生の設計図。そのほか、身の毛もよだつ恐ろしい報道あまたが甦<sup>よみがえ</sup>る。

生きることにしがみつき、喘<sup>あえ</sup>ぎながらもがんばり続けていたあの顔この顔……。

みんないなくなってしまうって、たったひとりとり残されている私だが、今、かくある「平和」という勿体ないほどのこの幸せを、壊れ易いガラスの器のように、そおっと大事に包み込む。

茶碗の中の最後の一粒を相手に、私はきょうも<sup>つばや</sup> 呟く。

「よくぞ、今まで生きてこられたものだ。」と。

＝ 此れが真実だ ＝

関口 邦一

「<sup>いくせいそう</sup>幾星霜 戦後の苦難<sup>しの</sup>耐え凌ぎ 生きる幸せ 素晴らしき朝」

此の詩は、昨年一月新年歌会始めの御題「幸」に応募した、私の作品である。戦後六十年、国民の総べてが困苦欠乏に耐え、今日を築いた。領土は接収され、六十年を過ぎる今日に至る<sup>まで</sup>迄、対外的にも様々な問題の後遺症に悩まされ、苦しんで居るのが現状である。何故こんな愚かな戦争をしたのだろうか？永久に悔を残す結果となってしまった。

さて、時は、昭和十八年十二月も半ば過ぎの事、各地の戦況は悪化の一途を辿り、予断を許さない状況に傾きつつ有った頃の事である。<sup>きゆうきよ</sup>急遽編成された我々の部隊に、海外派遣の出動命令が下ったのである。<sup>うじなこう</sup>早速宇品港に集結。同港に待機中の大型輸送船に乗船させられ、夕暮れの港を出発した。勿論、行先等秘密で知る由もない。<sup>しばら</sup>暫く走った頃、<sup>いずこ</sup>何處かの港に入港したらしく、<sup>ここ</sup>此處で夜明けを待った。すると二隻の輸送船が既に待機して居るのが目に止った。やがて夜明けと共に、此の船が行動を開始。我々の乗った船も此の二隻と合流。三隻の船団を組んだ。<sup>そこ</sup>其處に二隻の駆逐艦が、護衛艦として三隻の船団を抱え込む様に警戒態勢を完了。何處にか向かって出港した。太平洋に出た船団は、朝の太陽を浴び<sup>なが</sup>乍ら、白波を蹴立て、大波にもまれ、ぢぐざぐ航行を繰り返し進んで居る。そして二隻の駆逐艦が、船団の廻りを前後左

右に、高速で警戒して呉れて居る。誠に心強い限りで、不安感も余り感じなかった。話しによると、敵の潜水艦は特に日本の近海に多数展開して居るので、危険を避ける為、ちぐさぐ航行をして居るのだとの事。随<sup>したが</sup>って乗船部隊にも、対潜監視の勤務が義務付けられた。それと同時に、潜水艦の攻撃を受けた場合の非常退避訓練が、毎日二、三回づつ行われた。處<sup>ところ</sup>が船内には、船酔で寝たきりの者が多数居た。而<sup>しか</sup>し、此の訓練のラッパが鳴る度に、狭い出入口から全員が三分以内に甲板に飛び出す事が、至上命令である。船酔して居る者は、口元をおさいて、船端<sup>ふなばた</sup>に駆け寄り、汚物を吐き出すのが精一杯で、訓練なんか二の次であり、上下左右にゆれる船の手摺<sup>てすり</sup>に寄り掛かり乍ら、逆巻く荒波の海面を見ては、若しも潜水艦にやられたら自分から海に此の身を投げて死んだ方が増しだと、私はいつも考えて居た。

出港して約一週間だ。目に入る物は空と水ばかり。朝に晩に敵潜水艦出没の情報に悩まされ、精神的苦痛と闘い、死の恐怖に晒<sup>さら</sup>され乍らの毎日である。地上戦で死ぬのなら本望だが、海中でだけは絶対に死にたくない。それが本心である。

「輸送船<sup>ふね</sup>に乗せらりや、地獄の一丁目、死ぬは明日か、あさってか」

冗談交じりの、あきらめの言葉かも知れないが、身の縮む思いだった。そんな折りも折、この船の行き先が、南洋諸島のトラック島とポナペ島である事が知らされたのだ。此れから幾日後か知らないが、危険が益々高くなりそう

だ。心の準備を怠らない様にとの通達も受け、緊張の度合が増す。しからば心の準備とは何か？それは、最悪の事態に対しての、死の宣告なのだと私は受止めた。戦陣訓の歌に

「日本男子と生れ来て、戦争<sup>いくさ</sup>の庭に立つからは、名をこそ惜しめ、つわものよ、散るべき時は清く散れ」・・・云云

此れが元軍人教育の根元であり、此れが真実なので有る。

こんな苛酷な死の恐怖との苦しみも幾日続いて居た事か。そんな時誰か、突然、明日の午後にもトラック島に入港するらしいとの明るいニュースを持って来て呉れた。誰の顔も喜びにあふれて、憂うつな空気は一変して何處かに吹き飛んで、活気に満ちた。そして翌日無事にトラック島に入港する事が出来たのである。此處トラック島は、当時太平洋艦隊の根拠地であり、空母を初め、戦艦、巡洋艦、その他あらゆる艦艇が待機し、航空機も活発に行動して、益々、日本海軍此處に在り、の健在振りを深く感ずる事が出来た。此處で、行動を共にして来た船団と離れ、目的地のポナペ島に向けて、一隻で出港する事になった。これからは、周辺の状況は益々悪いとの事であるが、運を天にまかせて頑張るしかないと、誰も祈る様な気持ちだ。それでも緊張の連続だったが、無事にポナペ島に入港する事が出来た。母国を離れて四十三日目であった。早速全員が甲板に出て抱き合って喜び、万感胸に迫るものがあった。愈々<sup>いよいよ</sup>上陸で有る。各自の重い荷物を背負って、大地を踏みしめる

第一歩、誰の足もふらついて、よろける者も居た。長い船内生活が感覚を狂わせたのだろう。そして翌日からは、我が部隊の兵器、弾薬、その他の荷降しも完了、守備隊の第一歩を踏み出したのである。

處が上陸後五日目突然の爆撃である。B 2 4 数機に依るもので、五、六名の戦死者も出てしまった。その後は毎日の空襲が繰返される状況になった。そして三ヶ月後の五月二日、早朝より、空母を含む米機動部隊が本島を攻撃、多大の損害を受けたが、米軍の上陸迄には至らず、難をまぬがれ、不幸中の幸いであった。

以上、この文章は、私が実際に体験した一部分を書いたもので、前述の通り、此の様な苛酷な状況の中、極限状態にまで追詰められ、悲憤の涙と共に海底に沈み、帰らぬ人となられた戦友は其の数知れず、その無念な思いは察するに余りあり、此處に御冥福を祈ると共に、戦後六十年の今、忘れ去られようとしている此の悲劇、此の様な事実を永く後世に語り継ぐ事こそ、生存している私達の責務と考えて此の話を書いたのである。

## ＝ 戦争体験記 ＝

田中 幸雄

終戦後六十年、戦争体験者もすでに八十才を越え、体験話を耳にする事も少なくなったと思はれる。先の大戦で私達同級生の約三分の一の戦死者があったが、軍国主義時代の悲劇を認識することも大切な事ではないかと思ひペンを取った。

戦前は平時でも満二十才になると誰も兵隊検査により、体格の良い者は甲種合格となり三年間兵役に服す事になっていた。しかし昭和十六年大東亜戦争勃発するや現役兵はもちろん戦地にかり出され、更に戦域が拡大した為か、元現役の在郷軍人も軒並召集され、尚又兵隊検査で第一乙種の者まで召集され、三ヶ月の軍事訓練を受けた後、野戦行きとなった経過があった。私も開戦の翌年四月第一乙種であったが、東部三六部隊に衛生兵として入隊し、教練は衛生兵同士で受け、内務班教育は各班に一人位衛生兵が配属された。私も歩兵の初年兵一五名の中の一人として、古参兵、初年兵、と交互の寝台が住まひで六時起床、飯運びから食事の準備、朝食、食器洗ひ、洗濯、掃除、教練、昼食準備、昼食、教練、五時帰班、洗濯物取込み、銃や剣の手入、靴みがき、夕食準備、夕食、食後より教育係上等兵の内務班教育があり、上官の官民名や軍人勅諭の暗唱、一品検査、一問一答方式により貴様ら扱ひの意地悪質問の連続で、それはきびしいものであった。

私は教育係上等兵の隣の寝台で、洗濯から靴みがき銃の手入や身のまわり一切をやっている関係から、比較的当りは良かった。又私は青年学校時代、教練や軍人勅諭などやったことがあるのでその点助かった。そして三ヶ月がたち一期の検閲が終ると、歩兵の同年兵は殆ど野戦行きとなり、又新しく同数の初年兵が入隊した。私が例により掃除用具を持つと、古参兵殿自分がやります、と同じ階級であり乍ら古参兵になった。

そして衛生兵の本分である人体の構造や救急法の勉強をするため、道路筋向ひの陸軍病院本院に通修することになって三ヶ月がたち、衛生兵の同年兵もこれ又ほとんどが野戦行きとなったが、私は隊付として残ることとなった。

そして十一月秋期大演習があり、軍医と下士官と私の三人が隊付として参加することになった。夜中十二時原隊を出発。歩兵は時には戦闘を展開したが、行軍は休憩なしで日射病で倒れる者もあり、軍医が治療するので私は医療器具を持っているので休憩できたが、歩兵部隊は休憩なし。笠間周辺で日も暮れ露營できるものと思っていたが、夕食後引返すことになった。闇夜の行軍でもあり、足は棒の如く前の兵が止まると前者の背のうにつるした鉄かぶとに鼻を打つということもあった。機械的に足が出ているだけだった。二日二晩歩き通して鹿沼市外についたのは明け方。歩兵の人達は払暁戦を展開。私達は更に今市の民家まで歩いたが、三三五五着いたのは三時頃、翌日、日光細尾峠より足尾、桐生、明治村、閲兵式後解散したが、人力による戦争の

体験で限度があることを悟った。

そして十二月一日附で戸祭分院の患者係として、転入転出入退院の事務係を命ぜられ、書類手続きや電話連絡等をした。大阪や広島陸軍病院に上陸入院した患者が原隊に近い陸軍病院に転送されてくるので、当時戸祭には十六棟の病室があったが、千数百名の患者で一ぱいだった。

そして二年有余三月患者護送の出張があり、患者を送り届けた後時間があつたので、東京の空襲状況を見ようと夜行で東海道線に乗り替え両国駅で下車、隅田川土手を歩いたが、一面焼野原となり橋の袂に子供を背負って浮いている姿を見て、空襲から十日も過ぎて引取る人もなく警察や行政は何しているのか、日本も戦争は負けるなど痛感した。

そして七月十二日伍長に任官してはじめて、週番下士官の宿直勤務があり、病院内を巡廻して宿直室に入り、窓を見ると眞赤になっていたので外へ出て見ると市内が眞赤に燃えていた。まだ空襲警報は鳴っていない。そのうち爆音が聞こえ、キラキラ光るものが落ちたと思ったら眞赤な炎が上がった。私は非常持出を防空壕に運び、軍刀を持って立っていたが、病院や軍の施設には空襲はなかった。翌日市内を巡ったが、焼野原と化し立っているのは屋根のない土蔵だけだった。

そして私は本院勤務となったが、艦載機の機銃掃射により私の寝台脇の柱に弾痕があつたが、防空壕に避難していたので無事だった。

そして八月十五日正午に天皇陛下の御言葉があるので全員講堂に集合との連絡があった。当時陛下の御言葉なぞはじめてで、固唾<sup>かたず</sup>を呑んで聞入ったが、負戦という御言葉はなかったが、誰れ言うとなく戦争は負けたか、口ごもり乍ら解散した。

そして私は九月五日召集解除により懐かしの自宅に帰った。私の叔父二人も戦地に行ったが、一人は満州より南方で戦死したと聞いたが正式には場所もわからずじまい。

二度と戦争はあってはならない。憲法第九条の改正が話題になっているが、私共戦争体験者からすると、永久平和のため絶対変えてはならない。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」では困る。

総理の靖国神社参拝問題で中国デモがあったが、中国は、日清戦争、日露戦争、支那事変、満州事変、大東亜戦争と過去五回も戦場となり、日本の軍国主義復活を懸念している事で、私も出征当時は国の為、死を覚悟したこともあるが、戦地へ行かないとしても戦争体験者として永久の平和を願うものがあります。

＝ 宇都宮空襲 戦争はいやです ＝

塚田 ユウ子

四季折々に咲く草花の手入をする私、なんて平和なんだろう。

でも六十年前を思い出す。草木をとりのぞき防空壕を掘り、食するためなれない手で野菜づくり。

飢える子に夕餉ゆうげの粥を作らんと

花壇の夏菜黙して摘めり (悠子)

古いメモ帳、自分の記憶をたどってみよう。

昭和二十年七月十二日梅雨寒の日、母が丹精こめて作ったカボチャを主食に、スケソウダラ、アカザ等で早めの夕食、灯下管制のうすぐらい中で。午前零時頃と記憶している、ウオーボボ、けたたましいサイレン、空襲警報。私達は一斉に飛び起きた。手早く弟達に身支度をさせる。ラジオのスイッチ全く音がしない。夜空が眞赤、ザザザザ、ドドド、バーン不気味な音、天から地から湧いてくる。爆撃されている！でも一瞬何だこれ。わからなかった。ただすごい音、小刻みに体が震えていた。胸が波をうっていた。とてつもない音。廻りが眞昼のよう、一瞬にして火の海、めらめらと炎があがる。「避難しなくては、落ちつけおちつけ」、両足をふんばった。大きく息を吸ったのをおぼえている。離れでやすんでいた祖母を、母と二人がかりでカッパを着せ自転車に乗せ、町はずれの親類まで連れて行く。母は祖母につきそう・・・

ワーワ言葉にならない叫声と共に家の前を人々が走っている、群をなして。

突然友の声「早く逃げて曲町<sup>まげしちょう</sup>は焼けているのよ」妹さんの手をひいて口早に<sup>くちばや</sup>走り去った。会話など出来ない。「気をつけて」背中に一言、早く逃げなくては。焦っている。また近くで轟音、しっかり、頑張れ、自分をはげます。わけのわからぬ叫び声、震えが止まった。何くそ負けるものか！女学生だった妹六年生の弟に、幼い弟と姪をたのむ。頭巾をかぶせ、非常袋を肩に非難してゆく後姿を見送る。胸がジーンとした。我家に焼夷弾、不発であった。逃げまどう人々、救護の兵隊、消防団の人達、おしよせる波のよう。東武駅二条三条四条すっかり炎にかこまれている。息ぐるしい。あつい。煙が目にしみる。角に建っている土蔵が火をさへぎっている。異様な音は続いている。米機は去ったのか？東武あたりで又大きな炎がたちあがった。恐怖心はなくなっていた。今考へてみると漫画の様な仕草。家のまわりに水をかけ、長い竿の火ばたきで壁をぬらしていた。精いっぱい行動だった。「火をくいとめろ」消防団が集まる。破壊作業だ。彼等の声が断片的に耳に入る。「押切あたりはひどい」「死者が大勢でている」「団長爆死首がない」・・・何の感情も湧かぬ。バリバリ、ガッシャン、ゴー、炎の中に燃え落ちる音、駆けずりまわる人々の足音か？私達は全身ぬれネズミ。いくらか東の方が白んで来た、夜明けだ。早くあかるくなって。依然として火力はおとろへず。消防団長さんは四条町の方、カップクのよい姿が目に残っている。遺体はどこへ運ばれた

のか、母の従弟も爆死した。急に人の動きが多くなって来た。避難人が戻りはじめた。母も足早に、口早に「子供達は」と家に向けこんで来た。妹弟姪手をつないでかけてくる。ドロンコ状態で母にかじりついた。手をにぎり肩をなで無言で泣いた。泣きながら衣服を着替えさせた。江曾島の親類がにぎり飯をもってきた。一晩逃げ回ったつかれ、空腹、むさぼるようににぎり飯を食べた。おいしい、うまい、塩のむすびに昨夜の悪夢がいつしゅん消えた。笑顔が戻った。親弟妹を思い心配、喜び、心がひとつになることも二度とないだろう、私は感じた。前後したが妹弟の談である。

群をなして逃げてゆく市民の前方（大谷）に焼夷弾落下、その頃小国民と言われて五、六年生はいろんな訓練を受けていた。「焼夷弾落下！！伏せろ！！」六年生の子が大声で叫ぶ。大人も子供も一斉に地に伏す。「大丈夫前進」人々が走り出すとゆう。子供の号令に従う。今どこかの国で戦っている様と重なりあってしまう。西小学校全焼市内の学校ほとんど焼失した。焼けただれた町を数日後まわってみた。とてもみられたものではない。悪臭がただよっている。まだくすぶっている。宇都宮駅近く今泉町篠原さん、大工町に一軒土蔵の家がポツン。押切町に友の焼跡をたずねる。誰もいない、庭の隅にトタンが重なっていた。黒い固まりが二つ、息をのんだ。友ではなかった。あちら、こちらにこんな情景をみた。多くの人達が早く家族がみつかれば。むなしい気持で祈った。奇跡的我家一角何軒か焼け残った。不発弾は手早く処置され

た。

もう一言つけたしておきたい。知人に声をかけられた。食器をかしてほし  
いと云う。その人と一處いっしょに私もベントウ箱をもち、後について行く。藤田砂  
糖屋の焼跡、甘い香りが鼻をつく。焼け焦げた家の下には砂糖のかたまりだ。  
多くの人がそれをすくいとっている。私も固まっているものは石でたたきわ  
る。食せるものだけかき集めた。悪いことであるが・・・目前の品はほしか  
った。静かな日が二、三日、また空襲である。今度は艦載機ちよつと、一寸でも動く  
と狙われる。バリバリバリ低空での機銃掃射、でも家の辺りは一回だけだっ  
た。白い紙がとんでもねらい射ちされた。それから一ヶ月後、八月十五日戦  
争は終わった。まだ思い出すことはたくさんある・・・。

六十年の私の記憶そして残っていたメモ帳をたよりました。勘違いあるか  
もしれません。戦争はいやです。

焼跡のがれきの中に妹と

見し向日葵も小さく哀し (悠子)

## ＝ 井上<sup>ていしん</sup>挺進隊の最期 ＝

中田 英

昭和十九年十一月、第十五軍直属特別挺進隊が二個中隊決死隊として編成され、牟田口軍司令官の訓示に「任務ハ重且ツ大デアル、敵ノ進撃ヲ「イラワジ」河畔ニ於テ阻止スル。挺進隊ハ敵中ニテ情報収集、奇襲遊撃、謀略ノ三大任務ヲ完遂スベシ。君達ハ生キテ帰ヘツテモ白木ノ箱デ帰ヘツテモ、金鷄勳章ガ燦然トシテ輝クノデアル」との言葉があった。第一中隊櫻隊井上少佐を隊長とする六十名、他にビルマ人密偵若干名の編成で、潜伏地はイラワジとチンドウインの合流する三角地点である。

イワ村の村長宅に井上隊長、梅野軍医少尉、江藤曹長、当番兵二名、衛生兵長の私と密偵の七名が住み込んだ。隊の任務を察知されない様、赤穂浪士討ち入りの様に<sup>おんみつり</sup>隠密裡に事を進めた。私は部落を廻って医療を<sup>ほどこ</sup>施し情報を収集した。隊長は敵軍侵攻時の拠点とする隠れ家造りに苦勞され、武器、弾薬、食糧、水、医療品、軍衣等を<sup>いんとく</sup>隠匿した。ビルマ人に<sup>ふん</sup>扮するため、言語、風俗、習慣等学んだ。服装はエンジー（上衣）、ロンジー（スカート風）をまとい、ルビーの産出地なので指輪、耳飾り等にルビーを付けている。髪は長髪で、ペナ草履を履いて居る。一日二回の食事は右手指先で丸める様にして口へ放り込む、左手は不浄の手、大小便は野山で足すが紙の使用は不可。名前はポンギー（僧侶）がつける、私はモントイ（明朗）と呼ばれた。隊長は色白で

微笑を絶やさず現地人に接していた。

此処こゝに来て四十日を過ぎた頃、敵軍が迫って来た。デジー（村長）の顔色は蒼白となり身を隠してしまった。挺進隊も隠家を拠点として日夜行動に移った。敵中なので寸時の油断が許されない。一月下旬頃、「モニワ附近ニ集結シテ居ル敵装甲車、戦車ヲ攻撃、撃破セヨ」との司令部命令を受け、隊長は意を決して無線機を司令部に返還、各拠点へ伝令を發した。「日没ニ入ツテ各隊ハ牛車ニ戦闘用物資ヲ隠蔽積載シテ〇〇ジャングルニ集結セヨ」と。夜に入って戦闘用物資を積載した牛車の各隊が集結したが、一隊が遅着したため翌夜決行する事になった。灼熱の陽が真上に来て乾パンを食べた喉が乾いて耐え難く、密偵を近くの部落へ水汲みにつか遣わした。水を汲んで来た密偵は「部落民が訝いぶかしがっていた」と言ったが、水を飲んで私は谷から出て小用を足していた。突然パンパンと銃声が起こった。歩哨が狙撃され即死した。白日下で不利であるが発見されては一戦交えざるを得ないと隊長は決意されて「全員便衣ヲ脱ギ捨テ軍衣ニ着替エテ死ニ華ヲ咲カセヨ」と命令された。急ぎ牛車の荷をとき戦闘準備中、英軍将校の指揮するグルカ兵約二〇〇は包圍網を縮めて撃ってきた。金子伍長はチェッコ機銃を撃ちまくったが、突込みを修理する間私は手榴弾で防戦した。激しかった戦も次第に静まった頃誰かが「隊長は“敵ヲ各個撃破シテ拠点へ引揚ゲヨ”と命令されて、既に各員は引揚げてしまった」と言う。それを聞き金子伍長は「俺に従え」と言って、兵五人、

密偵五人と脱出を図ったが、谷は詰った刺の木で進めない。ジャングルは敵兵が搜索中なので出られない。袋の鼠となり谷底に身を潜めたまま脱出の機を待った。その間も負傷した戦友が自爆する手榴弾の音、我々を捜すグルカ兵や英軍将校の姿。金子伍長は機銃を構えているが「俺が撃つまで絶対に撃つな」と言って耐えていた。密偵の中には脱走しようとする者もいるので、私は右手に拳銃、左手に自爆用の一発の手榴弾を構えて、彼我に対して時を待った。やがて夜暗に乗じて谷を出、身近に戦死している戦友の左手小指ニ節から切り取り、三体の遺骨を身に帯して拠点へと向かった。月光に動く人影を発見、山！川！の合言葉で確認、隊長は「よく生きていてくれた」と手を取って喜んでくれた。隊長は“コノママデハ全員犬死スル”と判断されて「隊ハ一旦、イラワジ河マデ下ツテ情報収集、謀略ノ任務ヲ遂行セヨ、隊長ハ両小隊長トノ連絡ヲトルタメコノポンジション（寺院）ニ残ル」と言って金子伍長を懐刀として残された。

「隊長が残るのでは自分も残る」と言って誰も動かない。隊長は「命令ダ！！」と一喝した。隊長の身の安全を図るべく、密偵に“特別挺進隊は全員イラワジ河に向かって下る”旨の書状を敵方へ通報させ、敵を引付けて下る事にした。密偵は発った。隊長と決別して出発したが一人の兵が佇んでいる。マラリアの高熱で自爆を決意し右手は拳銃に手をかけている。私は拳銃をひったくり高熱の戦友を背にして隊の後を追った。敵は戦車を差し向けて我が行く

先々を包囲した。私は気も狂わんばかりに水を求め、戦車の轍<sup>わだち</sup>を踏み越え踏み越え隊の後を追った。夜明け前にイラワジ河<sup>たど</sup>に辿り着いた。敵が迫っているので密偵二名を隊長との連絡地点に行かせた。然し隊長と金子伍長はポンジー（僧侶）姿でノアレー（牛車）に乗ってポンジション（寺院）を出たが、その後大きな爆発音が聞かれたとの報告だった。其の後消息は絶えた。私達は軍の先導隊となった。

## = 平和への願い =

西田 俊子

昭和二十年八月十五日終戦。この時私は、四歳だった。

私が生まれ育った五島列島は、長崎港から船で四・五時間もかかっていたが、今では、フェリーで二時間半で行ける。海と山に囲まれたこの島から、よく晴れた日には、水平線の向こうにシルエットで映し出される長崎が見える。

昭和二十年（一九四五年）八月九日、長崎に原子爆弾が落とされた。

「長崎が燃えてるよ！」。外にいた母の叫び声に、家の中にいた家族は、慌てて飛び出した。家の前から沖を見ると、いつも見慣れているシルエットが赤く見えた。それがどういう事なのか、幼すぎて知る由もなかったが、興奮して大声で話している父母の様子から、ただ事でないことは理解出来た。

その時我が家では、父の一番下の弟が長崎市内に下宿して、工業高校に通っていた。父はきっと、躍起になって叔父の安否を確認しただろう。父だけではない、長崎で暮らしていた何十万の人達が、父や母や兄妹を、どんな思いで探し求めさ迷っただろうか。それは狂わんばかりであっただろう。

いや、例へ半狂乱になりながらも、命があった人は、幸せといわなければならぬ。七万四千人もの人々が、想像もつかない数の人達が、黒こげになって死んでいったのだ。

叔父は幸せな事に、原爆が投下されたその日、学校の遠足で中心地から離れた所にいて助かった。市内に戻ってみると、あっちにもこっちにも死骸が転がっていて、その中を縫うようにどこまでも歩いたそうだ。

「あの光景は、どんなに月日が経っても忘れられんなあ」と、目を閉じて話していた。

その叔父も今年、七十二歳で亡くなった。あの日以来、原爆手帳と共に、愛する長崎で暮らした。

私は結婚と同時に、夫の仕事の関係でここ栃木市に移り住んで、もう四十年になる。そんな中つい近年、一枚の写真のコピーと出会う機会があった。

それは母が子にお乳を与えている写真だ。幸せであるはずの光景には程遠く、何とも痛々しい親子の姿が、一目で見てとれる。

悲しみにくれた母の目はうつろで、目を閉じて乳首を口にふくんでいる赤ちゃんの顔は、黒く焼けている。「あっ、これは原爆の写真だ！」と、直感した。

“私達がどうして、こんな目に遭わないといけないのでしょうか”。母親の怒りを込めた声が、私の耳元に聞こえてきそうだった。その瞬間まで幸せに暮らしていた親子が哀れで、自分の家族と重なった。

八年前、脳梗塞で倒れた私の母は今、長崎の特別養護老人ホームでお世話になっている。それからずっと、夫と一緒に母に会いに行くのが年中行事

になっていて、写真に出会った時、長崎行きが決っていた。

“そうだ、原爆資料館に行ってみよう。あの写真の親子に会えるかも知れない。いや、きっと会える”。私の中で何か、沸き立つものがあった。

長崎で母を見舞った帰り、夫と資料館へ向かった。何度来ても展示されている内容が変わる訳はなく、目をそむけたくなる程むごい。それでも今日はしっかり目をむいて、あの写真を探さなければならない。それが自分に課せられた責任でもあるかのように、気が急いた。

先に歩を進めていた夫が、急ぎ足で戻って来た。「あった、あの写真があったぞ!」。小走りに夫の後を追いながら、緊張していくのがわかった。

写真の前に立った。「苦痛にたえながら手当ての順番を待つ母子」・・・(母子共に被爆、負傷して生後四ヶ月の幼児は乳を吸う力もなく、約十日後に死亡)。とあった。

私は一字一字丁寧に読みながら、小刻みに体が震えた。この写真を見てみたいと、強く駆り立てたものは何だったのか。

それは私も、子を持つ母親であるという事だ。今幸せに暮らしている人間として、傷ついている赤ちゃんがどうなったのか知りたかった。

一人残されていたら、誰かにお乳をもらえただろうか。この事が気になって仕方がなかったのだ。

無情にも私はほっとした。「よかった、お母さんの腕の中で死ねたのね」。

戦争とは何だろう。

無差別に人を殺し、より多くの殺人を犯した方が勝者となるのだ。こんな事が許されるはずがないことぐらい、誰だってわかっているのに、繰り返されるのはなぜだろう。

戦後六〇年。もう一度しっかり心に刻みたい。

「平和への願い」を。

## = 十七歳での軍属 =

### 水上 文一

小学校卒業して東京で働いて居た時、昭和十九年五月頃十七歳で徴用され、神奈川県横須賀海軍軍需部に入り、軍属として南洋諸島のパラオ島に赴任することになり、ある程度作業全般を習得し、同年七月頃貨物船で横須賀を出港。途中台湾の高雄たかおと基隆きーるんに寄港、フィリピンのマニラを經由してフィリピンのセブ島に寄港。此処でとてもパラオに行けないから上陸することに。船は敵機動部隊接近の情報ですぐ出港する。

翌日敵艦載機の襲撃があり、低空で波止場付近を一方向的に機銃掃射をやって立ち去る。昨日の船当然襲撃されたでせう。

その後市郊外で空家になった住民の家に居住する。仕事は防空壕作り、平地でしたので小高い丘を切り崩してセメント加工及び流し込むのですが、全部手作業でしたからかなりの重労働です。山の方にも防空壕がありましたが、ここは山ですので横穴式で素堀です。一度この壕ごうで入口に遮蔽物しゃへいぶつがあったのですが、敵機が山の頂上から斜面なを嘗める様に機銃掃射をした時、入口から十米位の所にいた同僚に当り、本人痛いひざと膝を抱えている。見ると前膝下に小さな傷、膝裏を見ますと傷口が大きく、肉がむきだしになっている。本人はワァワァと泣いているが、山の中ではどうにもならない。この件その後どうなったか不明です。

一度一人で車が通る山道を宿営地に向かって歩いていたら、右方向から敵機、それも目の前に右側急斜面のがけ、左側二米五〇位の高さの土手に思はず両手両足を廣げて張りつき、目を瞑<sup>つむ</sup>っていた。敵機は何もせず立ち去りましたが正直もう駄目かと。敵が上陸間近なのか、艦砲射撃が一段と激しくなってくる。軍の方も兵站要員は邪魔なのか、上からの指示で放浪の準備が始まる。今後行動は一緒だが、食事は各自自分で賄<sup>まかな</sup>う様にと。同時に食糧倉庫が解放され、主計官が好きなものを好きなだけもってゆけといわれ、そこで蟹缶を袋一杯に詰める。何しろ食べたことがないのでつい手が出ってしまったわけです。

居住区からの撤退のとき、病人と歩けない人にそれぞれ自決用に手榴弾<sup>しゅりゅうだん</sup>が渡される。可哀相ですが敵の目を逃<sup>のが</sup>れての放浪、しかも山道、自分だけで手一杯です。途中同僚が歩けないのか道端に座って、俺も連れていってくれーと懇願していたが置き去りです。薄情のようですがどうにもなりません。移動も当初昼間でしたが、その後夜になる。持参した食糧もなくなり、其の後は牛豚の肉を干したものを。水牛の肉はかたくて食べられない。先に進むにつれて家畜もいなくなり、鶏などは山中の大木の上で、捕まえることが出来ない。あとは畠のものを取って。

なぜか移動が止まった時は小人数、食事はバナナ、一食に一人一本でした。

一度住民のいない家から岩塩を見つけて来たときは、塩揉みを作る。

塩も一握りでしたのでそれっきり塩なし。

一度本部の人が来て、今度通る所は草原地帯で見通しがよく、機関銃が配置されていて、小人数で駆け抜けなければならないと話をして帰る。その後出発する連絡もなく、通過諦めたのか。

しばらくして、戦争が終わったから米軍に指定された所に行くからと連絡があり、住居から出て列に入ったのですが、途中で歩くことができないでその場に倒れる。その時引率の指揮者が来て、あとから来るようにと、ここで脱落者となる。同僚を置き去りにした報いか。なんとかして立ち上がろうとするがすぐ倒れる。その内に意識が朦朧<sup>もうろう</sup>となり、なにやら山の中腹で黒い姿の妖怪らしきものが踊っている。あれに殺されるのかな、せめて死ぬ前に田舎の山、今どうなっているかを見てから死にたい、と山を思いうかべた時に意識が戻り、今まで歩けなかったのが嘘のよう。途中元陸軍の兵二名と一緒に。夕方になり住民の家で一泊させてもらい、翌日集結地に。ここから米軍の車で収容所に。途中沿道住民から礮<sup>つぶて</sup>と罵声<sup>ばせい</sup>が飛んで来るが無事収容所に。ここで米軍尋問のあとシャワーを浴びて、今まで着ていたもの全部廃棄させられ、米軍から靴下から上下服と毛布一枚、全部新品。毛布のみ日本に帰る時返却させられる。靴は中古品、上衣の背中とズボンの両膝上にPWと印刷してあるの着用。この時食パン一枚支給される。居住区は屋外で大天幕、収容人数忘れましたが、一人用キャンパスベット木製でした。

しばらくしてセブ島からレイテ島の収容所に移送される。この施設は海上で船ではないのですが、居住区とホールが併設され、ベットは木製で二段。作業に出る時は大発だいはつで陸おかに。金額は忘れましたが賃金も支給される。いよいよ日本に帰ることに。米国の貨物船でしたから、船の中での噂は、米国に連行され強制労働をさせられる、との話が廣がっていた時、富士山が見えてきたものですから、みんなの喜びは大変なものでした。日本に帰れた！！

昭和二十年十二月二十日頃かと思います。船は浦賀に入港。下船する時、元兵隊俺達もう戦争しなくていいんだ、と喜んでいましたが、翌日食堂に並んでいた時、隣の列にいた元陸軍の兵隊が俺の所に来て、お前が捕虜になったから日本が負けたのだ、と投げ飛ばされましたが、反論する才能もなく黙るのみでした。

＝ 戦時中の父母を想う ＝

湯澤 トヨ

父は、明治38年4月1日に生まれた。大正2年4月宇都宮市立西原尋常小学校入学、大正5年3月4年で退学、足利に奉公に出た。

昭和6年12月ヨシ（母）と結婚、私が誕生した。

“父、幸吉のメモ”

昭和19年4月8日 戦時中の食糧事情。

栃木県食糧営団宇都宮第2配給所より通知

	続柄	年令	種別	1日分の米	配給品
配給一覧表	父	40	乙	390g	米・麦
	母	34	甲	330g	味噌
	祖母	66	甲	300g	醤油
	私	13	甲児童	330g	塩
	妹	9	甲児童	200g	油
	妹	5		120g	薪
	弟	1		120g	炭

父のメモは、新聞に挟み込まれた広告の裏に鉛筆で書かれたものである。

昭和19年7月3日帝国在郷軍人会宇都宮西原分会に1円を納めて入会した。

昭和19年9月20日（耳が遠く、体の弱かった父が・・・）軍属として徴

用となった。

千葉県木更津市高柳、海軍施設部赤崎小隊第111部隊第3中隊第1小隊第2班に配属。食糧増産で農場で野菜作りに従事した。

#### “家族を守るための母の苦労”

弟が生まれて4か月後に、父は軍属として木更津におもむいた。留守家族5人、疎開者4人を合わせて9人を養うことになった母は、日光精銅所からの注文を受けて、工場で使うささらを1日100本作って納め、生計を立てた。食糧難の上に、食べ盛りの子を抱え、母の苦労は、いかばかりであったか、当時、何もできなかった私は、今になって悔まれてならない。姑につかえ、疎開者にもよけいな口を出さず、愚痴1つ言わずに黙々と働き続けてくれた母に、偉大さを感じ、この記録を書きながら、母に恵まれたことに感謝している。

#### “戦火に包まれた夜”

昭和20年7月12日 宇都宮大空襲。

丁度眠りについた頃、母の大きな声に起こされた。家の前は真赤、身内の人を呼ぶ声が交じり合って、町中を駆け抜けていく。リヤカーから物がころころ落ちて拾おうともしない。西へ西へ、鹿沼街道は、今まで見たことのない恐ろしい世界になっていた。母は弟を背負い、私は妹の手を引き、身近に置いてあった荷物を持って、長坂の親類の家を目ざして歩いた。弟は泣く。

妹は私にしがみつき泣きつつらでそれでも懸命についてきた。牧場の森にいた時、鹿沼の方に焼夷弾が落ちた。不謹慎のようだが、夜空にきれいに見えて不思議だった。

次の朝、長坂の親類の人たちに見守られ家に向かった。道には、いろいろな物が散らばっていた。一夜にして変わった町、戦争の恐ろしさを目の当たりに感じ、これからの生活への不安が大きく広がっていった。

### “次は、機銃掃射”

学校へ出かけた。勉強はできるはずがなく、焼跡作業に町へ出た。

ガラスはドロドロにとろけ、鉄筋はぐにゃぐにゃに曲がり、悪臭が漂って、どこがどこだかわからない。真夏の太陽が照りつける。しかし日陰はない。

そこへ「空襲警報」。私は、一目散に校門のそばの大きな木の下へ逃げ込んだ。B29が低空で飛んできて、焼跡に向けダダダダと機銃掃射をする。そして、また多くの人々が亡くなっていった。

学校（現在の一条中）は焼けなかったが、市役所が避難してきた。

しかし、学校の屋根は機銃掃射でやられて穴だらけとなり、雨の日は大変だった。家庭科室のタライ、鍋、釜、洗面器が雨水を受けた。体育館には、不発弾が撃ち込まれ、危険な状態でみんな寄りつけなかった。

### “静寂の夜の町”

あの大空襲の晩から、夜の町が恐ろしくなり、夕方になると「すみません。

田舎に出かけます。よろしく。」と、隣組の人たちが次々と布団や荷物を持って、町から出て行ってしまふ。

「ここで死んでもいい。みんなでいよう。」と言いつつも、1人2人去って行くと寂しくなり、夜遅く家族手をつなぎ、母の実家へ行ったこともあった。

田んぼで蛙が大合唱、数えきれないホタルの乱舞、戦いの合間の不思議な情景を忘れることはできない。町の人々は殆ど<sup>ほとんど</sup>家を離れ、自分の安全であると思つた所で一夜を過ごした。だれもいない夜の町、戦いの町。

#### “8月15日 終戦”

深い意味も知らずに戦いが終わりホッとした。27日、父、徴用解除。うれしかった。昭和20年11月7日、横須賀海軍施設部第109部隊木更津部隊より、退職手当600円、脱退一時金13円80銭、為替料2円、書留送金料40銭、差引送金611円40銭、運輸省東京地方建設部木更津地方出張所より送金されてきた。

恐ろしく悲しく苦しい戦いのさなか、父が木更津から持って来てくれた海苔や魚や貝類の味は、夢の中の宝物であった。自然と平和を願う。

## ＝ 戦時下の女学校生活の思い出 ＝

### 匿名希望

昭和十六年十二月八日、わが国は国運を賭しての戦争に入った。この大本営発表の臨時ニュースをきいて、祖母は「戦争が始まると英語は敵国語だから廃止になるそうだ。」といった。これを耳にした青年が云った。「戦争をするには、まず相手の国情を知らねば勝てない。それには敵国の言葉を学ばねばならない。英語こそこれから一層必要になりますよ。」と。

翌十七年私は女学校の一年生になった。英語はあって楽しかったが、授業中時々警戒警報や空襲警報のサイレンで校庭の端の方の防空壕に避難した。

よく晴れた南の空を白銀の敵機B 2 9が編隊を組んで東の方から西の方へ飛んで行くのが見えた。「太田の飛行場を爆撃にいくのだろう。」と皆が云っていたが液晶テレビをみるようなあざやかな敵の勇姿であった。だがこれを迎えうつ我が方の機は、作戦なのか無いのか一機もなかった。

ある日工学博士の講演があつて、

「空中戦などでは、いくらわが忠良なる兵士が大和魂で頑張っても、機の性能が相手より劣っていては追い撃ちもできないのです。我が方も米機と同じ能力のものにしなければならないのです。」ということを伺った。工業力も競争だなと思った。

また農業方面も人手不足で、春と秋に二週間位農家へ手伝いにいった。田

んぼで作業中沿道を知事さんが通られて、私達に励ましの言葉をかけて下さった。それは「平均をあげる人になれ。」ということだった。「あの人がいると仕事が早くよく出来る。あの人がいるといいな。」といわれるような人になって下さい。」ということでした。

この平均をあげる人になるのはむずかしかった。私など一生懸命作業をしているつもりなのに、友人よりおそくなっていて、食料事情のせいかと思ったりした。当時農家か農家に親類のある人は、いくらか良かったようだが、国からの配給だけで生活している者は、お米だけの御飯はたべられず、農家からやっとうずってもらった冬菜や配給の大豆が半分以上入った御飯やさつま芋の茎を粉にしたもののかたくねってふかしたもの（代用食）などでがまんしていた。「そのせい」等、身勝手なことを愚考したりした。

三年のとき戦況はきびしく学校を工場として働くことになった。飛行機の前面につけるカーリングというのをつくる作業を、一般の工員の人に教わりながら働いた。私達はその部品をつくるので工具は電気ドリルとハンマー、ドリルであけた穴にリベット（鉚）を入れてハンマーではたけばよいのですが、これが熟練されてなくて「少しでもすきまがあると機は空中分解してしまうのだ。」と聞き緊張した。これには検査があつて工場の責任者はとても御苦労の様だが不良のところがあつたら、どんどん不合格にしてほしいと思った。空中分解しては大変だから。この人命にかかわる仕事は、私達の手作業

でなく精密な機械でつくられ精密に検査されるようにならなくてはと思った。私達は仕事が上手になれるよう、多くの良い機が生産されるよう欠席はしない様にと考えた。

しかし、ここで不幸なことがおきた。遠方から自転車通の友が高熱をがまんして出席し、早退はしたものの無理をしたので、肺炎になり死亡されてしまった。

こうしてみんな勝つまでは、と頑張っていたある日、玉音放送があつて戦争は終わった。

「蝉も<sup>な</sup>哭き人も泣きけり今日真昼」(吉屋信子)

八月十五日 暑い夏の日であつた。私達は学校から連絡があるまで家庭で待機することになった。

いよいよ学校が始まった。四年生の二学期から新任の教師を迎えて英語も再開されたが、二年のはじめまでしか習ってない生徒で、先生も私達も苦勞した。そこで二学期の評価はテストでなく「婦人参政権について。」というレポートを提出すればよいことになった。

このレポートで先生が大変賞賛されたのがあつた。婦人参政権をえたということは、人は皆平等で女性も男性と同等の位置に立ったのだから、女性は男性のよりよき理解者になるであろうし、またそうあらねばならない。」とかいた友人のであつた。

戦後宮中歌会のお題「母」に入選されたのに、

「戦のさ中に育ちしわれなれば、知らぬこと多き母となりぬ。」というのがあったが同感である。戦後六十年、戦のさ中に育ったので麦刈、田植、稲刈などは習ったが勉強不足の私である。もう一度学生になりたいが、すでに七十を越してしまった。だから毎日、これからほんの少しずつでも学んで行こう。

## = 大きなおにぎり =

田村 祥子

「プールへ行くから、おにぎりを用意して。」

早速、私は、三合半のお米を研いでご飯を炊く。これから、いつものお弁当を作るのだ。

おにぎりを三つ。子供達のは梅。それも、梅干しだけを細かく散らしたものの。もう一つは、お父さんの分。梅の他に、ふきや山椒のおかか煮、さけやじゃこ等、その日のものを入れる。ほっかほかのおにぎりが三つ。のりで包めば出来上がり。ぷーんとのりの良い香り。一つずつラップで包む。おにぎりが息する透間<sup>すきま</sup>を少しだけ空けておくのがポイントだ。

黒い大きな物体が三つ。本当に大きい。大人の手のひら位ある。お腹のどこへ入ってしまうのだろう。あの三角が、へびのお腹のように、彼らのお腹へ入っていくのだろうか。想像すると、おかしくて笑いが込み上げてくる。

おにぎり三つとお茶三つ。これで、いつものお弁当が完成だ。ずっしりと重い黄色いバッグ。

今まで、色々と試したが、どうも、プールの後は、このどでかいおにぎり一個とあったかいお茶に限るらしい。何と言っても梅のおにぎり。しかも、お母さんの作った梅干しが最高だと言う。

九時四十分。何やら良く分からないが、三人は、うれしそうに出掛けて行

く。行く先は、栃木市運動公園のプールだ。お父さんと小六の息子と小ニの娘。休憩をはさみ三時間。いつもそう。一杯泳いで、三人で大きなおにぎりをほおぼるらしい。芝生で風に吹かれながら。ラグビースタジウムで雨にふるえながら。帰りの車の中で・・・。

さて、三人が出掛けると、私は、いつもの家事にとりかかる。洗濯、掃除、お布団干し、そして、花の手入れ。

陽の光、風の音・・・花の手入れは、私の大好きな時間だ。時折、子供の頃と同じ音が、においが風に乗ってやってくる。あの頃が懐かしく浮かんで来る。

豊かな自然の中、豊かな子供時代を両親は作ってくれた。一生懸命に私達を育ててくれた父と母。感謝の気持ちで一杯になる。大人になっても、子供の頃のことは、決して忘れない。それは、今も私の心の支えとなっている。だからこそ、我が子にも、心豊かな子供時代を送ってほしい。日々の自分を反省し、明日の自分を花々に問いかける時。

ゴーン。お寺の正午の鐘。もうすぐ、朝早く部活動へ行った中ニの娘が帰って来る。

それから、二人でのんびりお昼。

「ただいま。」

しばらくすると、プールの三人が賑やかに戻って来た。勿論、黄色いバッグ

は空っぽ。あの大きな三角は、いずこへ。何だか、又、吹き出しそうになる。

でも、おにぎりの代わりに、色々ないいものが一杯入っている。笑顔、頑張り・・・半日、子供を見てくれたお父さんに感謝する時。

その後、瞬く間に、それぞれの午後が始まる。お父さんはのんびりとテレビ。小六の息子は、すぐに友達と自転車で炎天下へ。小二の娘は、ざりがにの世話を竹馬。一輪車にきゅうりのせん切りとよく動き回る。中二の娘も何やらやっている。そして、私は、又、洗濯物の山と奮闘し、夕食の支度やらと忙しい。

これが我が家の休日である。

ところで、先日、平和に関する作文について市報で見かけた。その時、これが、我が家の平和だと思った。

勿論、日々の生活の中で穏やかな事ばかりではない。上手くいかない事も沢山ある。子供達をささいなことで叱ってしまったり、夫婦でけんかをしてしまったり、毎日の生活は、そう美しいものではない。

しかし、日々の様々を皆で考えたり、乗り越えたりして、毎日を送ることは、大切なことだと思う。一生懸命に人生を送ることであるし、家族が一丸となってこそ、出来ることである。家庭の平和とは、そんな日々の努力の積み重ねではないだろうか。家庭の平和が集まれば、やがては、日本中、世界中が平和になる。主婦としては、そのくらい単純に考えたいし、又、その為

に、自ら出来る小さな努力を続けたい。

最近の身近な痛ましい事件の数々、又、国々の大きな問題は、私の思うような単純計算では、解決するはずはないとは分かっている。

でも、家族五人が日々出来る事と言えば、一人一人が、今の自分を精一杯生きることだ。親も子も、今の自分を、人間として少しでも高めるよう努力することだ。一生懸命子供を育ててゆく努力を、私は惜しまない。それは、一個人としての私に出来る平和への努力だと思うから。

それにしても、あの大きなおにぎり与世界平和が結びついてしまうのは、やはり、我が家が平和だからだろうか。

「お母さんのおにぎりが、一番おいしい。」

等と言われると、天にも昇る幸福の絶頂に至る。

そんな、うれしさの積み重ねが、我が家の平和の証しであるし、それが、いつか、世界の平和へとつながることを祈らずにはられない。

## = 平和作文 =

知久 文子

第二次世界対戦が終って、今年で六〇年たちました。もうそんなになったのかなと思うと夢の様です。あの頃二〇才だった私は、八〇才になりました。ほんとうにうその様です。昭和の御代から平成の時代になり、その間とても幸せで、子供達や孫達と一緒に楽しく暮らしております。

その間に日本の国は非常に発展して、日本中高速道路ができ、新幹線が走り、その上に超特急も走っています。距離が近くなり、時間も短縮されて、どこへ行くにもとても便利になりました。その他にお座敷列車とゆう貸切電車もできて、仲良しのお友だちと楽しい国内旅行もできる様になりました。もっと凄いのは、飛行機で海外旅行に行く事です。アメリカでも、中国でも、ハワイでもあっとゆう間に行ける様になりました。ほんとうによい時代が来たものです。

こうなると、六〇年前の戦争など忘れがちになります。今よその国で戦争をしている所があって、日本の自衛隊がお手伝いに行っていますが、なかなか止む様子がありません。日本でもこの頃人災や天災が続き、テレビや新聞を見るのもこわい位です。みんなが心をつにして、助けられたり助けたり、安心して楽しい毎日を送りたいと思います。それにはまず第一に、何がなくとも健康な事です。旭町明壽会の人達は、みんなお元気で、良い方ばかりで

す。輪投げ、旅行、運動会など、気がそろって楽しく参加しております。

遠いしんせきより、近くの他人といますが、まるで兄弟の様です。

みなさんがこの頃、かわいいひ孫が生まれてとても嬉しそうです。私も早くほしいと思っております。今日本は少子化時代で子供がへりました。子供は国の宝、家の宝です。悪い心を持たず、親切なやさしいがんだりやに育て、これからの日本を守ってもらいたいと思います。

今日本は、経済不況と自然界の猛威による天災、凶悪な事件等でなやんでいます。決して悪い心をおこさず、平和な楽しい日本を作る事に邁進しましょう。

## 平和ヲ雲ニ託ス

盛田 広

雲ヨ、下界ハ平和デユートピアト思ウカネ  
平和ハヨイモンダケドナ  
人殺シノ道具デ争ツテル人達ガイテ困ルンダ  
人ガ人ヲ殺シ合ウナンテ  
人間ノスル事デワナインダヨネ  
雲ヨ、争ツテル方ニ行ツタラ  
馬鹿ナ事ダ止メロト言ツテクレヤ  
戦争ナンテ勝ツテモ負ケテモ  
残ルモノワ貧困ト苦ルシミナノダ  
犠牲ハ女ト子供ナノダケドナ  
土ホコリニ汚レタ顔、ウツロナ目デ  
戦争止メテクレヤ学校ニ行キタインダ  
世界ガ平和ニナツテホシインダ  
戦争ハ嫌ダユートピアガホシイ  
頼ムデ雲ヨ

編集・発行

〒328-8686

栃木県栃木市万町9番25号

栃木市総務部総務課行政管理係

電話 0282-21-2342